



アートが拓く超高齢社会の可能性

高齢者の潜在力を引き出すアートのポテンシャル



社会研究部門 主席研究員 吉本 光宏

mitch@nli-research.co.jp

1—全国に広がる高齢者とアートの出会い

北海道襟裳岬から20kmほど西北に位置する浦河町。その総合文化会館の稽古場に、毎週土曜日、朝9時半に三々五々集まってくる9人のお年寄りたちがいる。最高齢は89歳のキヌエさんだ。「今日も準備体操から始めましょうか」とラジカセのスイッチを入れると、水戸黄門のテーマソングが流れ出し、オリジナルの準備体操が始まる。彼らは高齢者演劇集団「座・たくあん」の皆さんである。

劇団名の「たくあん」は、大根役者が年齢を重ねるほどに味が出ることを願ってつけられた。劇団員の平均年齢は83歳、少し身体の不自由な方もいるが、ゴローちゃん、のぶ子ちゃん、はつえちゃん、ミッチ…とファーストネームで呼び合う。稽古場には笑いが絶えず、とにかく元気だ。

浦河町の人口は約1万4,000人、高齢化率は26%で独居老人も多い。2002年の旗揚げからこの劇団の活動を支えてきた浦河町社会教育課の砂子沢登さんは、我々は「高齢者のケアを施設型の福祉に頼りすぎているのではないかと思う」と、これまでの劇団の活動を振り返る。座・たくあん以外にも高齢者演劇は全国に広がり、シニア演劇Webというサイトには、北海道から九州まで30を超える高齢者劇団がリストアップされている。演劇に限らず、高齢者の芸術活動は音楽やダンスにも広がる。

高齢者とアートの関係は、自ら演じたり、歌ったりするだけではない。福祉施設にアーティストが出向き、お年寄りを対象にワークショップという参加・体験型の活動を行う取り組みも徐々に増えてきた。杉並区を拠点に活動するNPO法人芸術資源開発機構（ARDA）は、1999年に高齢者施設へのアートデリバリー事業を立ち上げた。認知症の高齢者を対象に、美術館で絵画の鑑賞プログラムを実施しているのはNPO法人アーツアライブである。対話型の絵画鑑賞を通して雄弁に語り始める高齢者の反応に、介護士の方々が驚くことも少なくないという。

演劇や音楽を始めた高齢者の多くは、楽しくて辞められなくなった、第二の人生で新たな生きがいを見つけた、人に見てもらうのが嬉しい、と口を揃える。高齢者施設では、アーティストのワークショップに参加して、リハビリでは上がらなかった腕が上がった、車いすに座りっぱなしだったおじいちゃんが、気がついたら立ち上がっていた、など、周囲が驚くようなこともしばしば起こっている。



左：座・たくあんの舞台公演（写真提供：浦河町総合文化会館）、右：稽古の後の歓談の様子

それらの事例を俯瞰すると、高齢者の芸術活動は趣味や娯楽という範囲を超えて、アートが高齢者の新たな潜在能力を引き出しているのではないかと、さらには、現在の高齢者福祉に対する考え方に大きな疑問を投げかけているのではないかとさえ思えてくる。

本稿では、高齢者が自ら芸術活動に取り組んだり、アーティストのワークショップやアートを体験したりする活動を取り上げ、関係者への取材や活動のエピソードから、アートが拓く超高齢者社会の可能性を考えてみたい。

2—各地で広がる高齢者の芸術活動

1 | 座・たくあん——高齢者の社会問題を芝居にして高齢者を元気づける

この劇団は、2002年2月に浦河町で上演された高齢者による市民参加型舞台創造事業・音楽劇「心の記録～よみがえれ幻のレコード」の出演者が同年4月に旗揚げしたものである。これまでに30分前後のオリジナル作品8作の創作・公演を行い、2008年には東京公演も実施している。

創設時からこの劇団の世話をしてきた砂子沢さんは、彼らの取り組みを、「文化でもない、福祉でも介護でもない、たまたま演劇だった」というが、この活動が続けることで、お年寄りたちに様々な変化が生まれている。稽古に出かけるために歩くので健康になる、人と会えば会話して楽しくなる、人から見られるとおしゃれに気が回って服装が明るくなる、人前に立つのが恥ずかしかった人が「出たがり」になる、(公演などで) 誰かの役に立ちたいと思うとそれが生きる力になる、というのである。

稽古場の雰囲気はとにかく和やかだ。筆者の訪問時も、稽古は1時間程度で切り上げて休憩。持参のたくあんやお菓子でお茶を飲みながら、談笑が続く。「10周年記念でブロードウェイ公演やろうか」「(砂子沢さんに) 予算取ってくれる」「家族に止められるんじゃない」「俺は死んでも行く」「八丈島まで行けたんだからどこでも行かれる」「飛行機に乗ればいいんだから」「アメリカは無理でも沖縄から誘いがあるといいなあ」「お酒あるの、沖縄って」「あるある、泡盛は旨いよ」「(筆者から) このレ

ポートは全国に配りますから、いろんな誘いがあるかもしれませんね」「お酒さえあればどこでもいい」「砂子沢さんも私たちのお陰でいろんなところに行かれていいね～」…。

これまで、オレオレ詐欺を題材にした「偽孫に気をつける」、悪徳訪問販売の「明るい人々」など、高齢者の社会問題などをテーマに年1作のペースでオリジナル作品を発表し、福祉施設の依頼などで公演を行っている。現在稽古中の作品は、劇団の10周年の活動を振り返った「七転び八起き」、これまでの脚本はすべて脚本家の高橋聡さんのオリジナルである。

本番では、まず「私たちは皆80歳以上です」という自己紹介で大きな拍手が起こる。お年寄りなので、セリフを忘れることも少なくないが、豊富な人生経験からアドリブで切り抜け、また大きな拍手。「とにかくお客さんの反応が嬉しい。この先長くない人生、楽しむ方が勝ち」というのは座長のグローさんだ。高齢者が高齢者を元気づけるという活動には、思わず応援を送りたくなる。

2 | 生きがい探偵団——多様な芸能で生きがいづくり

同じく北海道の札幌を拠点に活動する「生きがい探偵団」は、演劇をはじめとして奇術や朗読、漫才、オカリナ演奏、フラダンス、南京玉簾などの多様な芸能を、福祉施設や病院、老人会や町内会などの依頼で披露している。活動はすべてボランティアで、年間10～15回程度。同じ北海道ということで「座・たくあん」とも交流があり、メンバーは40名前後、平均年齢は65歳ほどである。

探偵団が生まれたのは、2000年12月に「健康生きがいづくりアドバイザー北海道協議会」が北海道演劇財団と共同で実施した「中高年のためのコミュニティ演劇ワークショップ」がきっかけである。ワークショップのファシリテーターを務め、今は探偵団団長でもある北海道医療福祉大学准教授の長谷川聡さんは、探偵団を福祉的文化活動と位置づける。探偵団の活動が元気高齢者の健康や生きがいづくりにいかに貢献しているか、次のようなエピソードを紹介いただいた。

現在96歳で探偵団最高齢の男性は85歳で入団し、88歳の時、病気になって療養病棟に2年半入院したものの、「また仲間と芝居をしたい」とリハビリに励んで自宅復帰を果たし、今でも舞台上に立っている。要介護3から要支援2への回復は前例がなく、ケアマネージャーが判定ミスを疑われるのを恐れて困っているという逸話もある。探偵団のフラダンス・チームが、札幌郊外の高齢者サロンで月一回、1年近くフラダンス指導に通ったところ、フラダンスを続けた高齢町民の通院回数と国保医療費が確実に減ったそうである。

その他にも、探偵団の活動を続けるために息子夫婦との本州での同居を断ったご婦人、老人ホームでの公演の名場面で涙を流して拍手をされ「自分が人の役に立つとは思わなかった」と驚いた退職男性など、探偵団の活動が参加者の健康と生きがいに影響を与えたエピソードは数え切れないという。

3 | 銀河ホール高齢者劇団——公募で高齢者劇団を結成、3市町を巡回

岩手県西和賀町が、北上市と秋田県横手市と共同で実施している高齢者演劇事業は、毎年参加者を募集し、8月に劇団を結成して11月中頃から3市町を巡回し12月に解散するというスタイルである。同町の演劇専用の「銀河ホール」で、青森市の劇団「支木」の演出家、中野健さんが、週に2～3回、1回2時間の指導をし、3ヶ月で20回程度の稽古を行う。

中野さんは「今まで各種サービスを一方的に受ける側だった高齢者や障害者が、老いても障害があ

[図表-1] 取材を行った高齢者の芸術活動団体の概要

名称 創設年 活動拠点	活動の概要
座・たくあん 2002年4月 北海道浦河町総合文化会館	<ul style="list-style-type: none"> ● 浦河町総合文化会館が2002年4月に実施した町民参加型の音楽劇「心の記録～よみがえれ幻のレコード」の参加者を中心に結成。 ● 座員9名(男3名、女6名 創設時は10名)、平均年齢83歳 ● 稽古は毎週土曜日9:30～12:00 ● 高齢者施設などの依頼によって各地で公演。毎年1作品を目標に稽古を重ねる。 ● これまでの作品は、オレオレ詐欺を題材にした「偽孫に気をつけろ」、同窓会と恋心を描いた「恋の町、札幌」、「人生の達人」、「七転び八起き(十周年記念)」などすべてオリジナル。2008年には「恋の町、札幌」の東京公演(八丈島)を実現。 ● 文中のオリジナル体操の他に、「シャバダ・ジジババ」というオリジナルソングあり。
いきがい探偵団 2000年2月 札幌市社会福祉総合センター／札幌市内民間スタジオ／個人宅	<ul style="list-style-type: none"> ● 2000年に健康いきがいつくりアドバイザー北海道協議会と北海道演劇財団が共催で「元氣中高齢者による高齢者施設への芸能訪問活動事業」を実施したのがきっかけ。 ● 40～50名の任意団体。60歳代から最高齢は95歳。 ● 病院、介護・福祉施設への芸能訪問、市町村社会福祉協議会・教育委員会や町内会・地域団体などからの招聘で年間10～15回、ボランティアとして寸劇の他、お笑いやマジックなどを提供。
銀河ホール高齢者劇団(劇団名は毎年決定、2011年は「ふきのとう」) 1999年 岩手県西和賀町銀河ホール	<ul style="list-style-type: none"> ● 1999年に高齢者・障害者演劇ネットワーク事業としてスタート。 ● 毎年高齢者を募集し、8月頃に劇団を結成、11月中頃から3市町を巡演し12月に解散する。参加者の固定化を防ぐため原則として1度参加したら以降3年間は参加できないしくみ。 ● 今年の参加者は11名。年齢は62～82歳。西和賀町、北上市、秋田県横手市からも参加。 ● 稽古は週2～3回。今年は10月15、16日の銀河ホールでの地域演劇祭に参加予定。2007年には東京公演(前進座劇場)を実現。 ● 西和賀町の教育委員会と社会福祉協議会が共同で実施。
さいたまゴールド・シアター 2006年4月 彩の国さいたま芸術劇場	<ul style="list-style-type: none"> ● 55歳以上の男女を公募し、北海道から九州、海外からも1,266名が応募。芸術監督の蛭川幸雄が15日間かけて1,011名をオーディションし、男性21名、女性27名の48名で発足。 ● 現在の団員は60歳から85歳までの42名(2011年7月現在)。 ● 2007年6月「船上のピクニック」以降、4作品を公演。その他に「Pro-cess」という中間発表公演も3回実施。 ● 演出の蛭川幸雄をはじめ、第一線の講師陣による本格的な稽古、舞台づくりが行われる。
65歳からのアートライフ 2003年4月 横浜市青葉区フィリアホール	<ul style="list-style-type: none"> ● 毎年2回、65歳以上の方々によるコンサート(声楽・器楽)を本格的な室内楽ホールの「フィリアホール」で開催(器楽は60歳以上が対象)。 ● 声楽はコーラスではなく歌曲やオペラアリアなどの独唱が中心。演奏時間は6分以内(曲数は2曲以内)で、1回のコンサートは2日間で約50名・組が参加。 ● NPO法人65歳からのアートライフ推進会議が運営。 ● 第一線で活躍する声楽家が講評を行うことが、参加者の励みになっている。

(注) 筆者がこれまでの研究活動の中で把握した事例で、網羅的に調べた中から抽出したものではない。
(資料) 各団体の提供資料、HP掲載情報などに基づいて作成。

っても演劇公演活動を通じて、これまで培った技術や能力を最大限に発揮し、明るく生き生きと(自己)表現できるようになってもらいたい」とこの事業の意義を述べている(資料1)。

2007年には劇団「優夢座」と名乗って、前進座劇場で東京公演も実施しており、その年に発表された感想文集には、「これからの残り少ない人生にとって自分も楽しみ、他に一人でも喜んでくれる人がいれば、それで観客の皆に元気を与えそれ以上の元気をもらえれば、自分なりに頑張っていける」という参加者の言葉が掲載されている。

4 | さいたまゴールド・シアター——年齢を重ねたことから生まれる身体表現を追求

2006年4月に彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督、蛭川幸雄さんの発案で発足した「さいたまゴー

「ルド・シアター」は、これまでの三つの劇団とは少し趣が異なっている。「年齢を重ねるということは、様々な経験を、つまり深い喜びや悲しみや平穏な日々を生き抜いてきたということの証でもあります。その年齢を重ねた人々が、その個人史をベースに、身体表現という方法によって新しい自分に出会うことは可能ではないか？ということが、私が高齢者の演劇集団を創ろうと思った動機です（蛭川幸雄）」（同劇団HPより）というのが、この劇団創設の狙いだ。

55歳以上という条件に、1,000人以上の応募があり、蛭川さん自身が全員のオーディションを行って48名で発足、現在は60～85歳の42名が団員となっている。これまでの公演は、岩松了、清水邦夫、ケラリーノ・サンドロヴィッチ、松井周と、日本を代表する劇作家が書き下ろした新作が中心で、蛭川さんが演出を手がけ、その活動は、新聞やTVにもしばしば取り上げられた。彩の国さいたま芸術劇場の協力で、いくつかのTV報道の録画記録を拝見すると、劇団発足の経緯は異なるものの、これまでの三つの劇団同様、劇団員の表現に向かう喜びが伝わってくる。

78歳で俳優を目指して入団したものの、5ヶ月後に下半身麻痺の病気になって入院した男性は、医者から「回復しても車椅子での生活だろう」と言われる。しかし、劇団仲間からの励ましに支えられ、10ヶ月間のハードな歩行訓練のリハビリを続け、病に倒れて1年後に稽古に復帰する。稽古の間にもリハビリを続け、「思い出の日本一万年」の舞台に立った。「生きていくうえでのエネルギーがどんどん蓄えられていくよう。生きなきゃいけないんだ、と目に見えないこの（劇場の）中の気力に助けられていると思う」とインタビューに答えている。

「アンドゥ家の一夜」に出演した83歳の女性団員は、メイドの役を演じた。脚本の完成が遅れる中、記憶力の衰えと戦いながらセリフを覚え、自分なりの演技も工夫しながら、無事に初日の舞台を演じ終える。「いくらでもやりたいことは今からやれると思った」「つまりは日々の積み重ねで、何でもなかったことが幸せにつながっていく」と語る姿が印象的だ。

5 | 65歳からのアートライフ——本格的音楽ホールでのコンサートに人生をかけるお年寄りたち

音楽の例もひとつ紹介しておきたい。横浜市青葉区のフィリアホールでは、「65歳からのアートライフ」と題したコンサートが定期的に開かれている。去る8月に開かれた第14回公演では、65歳から88歳まで50人以上の高齢者が、日頃の練習の成果を独唱と器楽演奏で披露した。主催はNPO法人65歳からのアートライフ推進会議である。

「高齢者の方々とともにアートな暮らしを演出し、さらなる活力にあふれた人生創造を目指して活動する」というのが、このNPOの目的で、年2回、音響の良さでも定評のある本格的なクラシック専用の「フィリアホール（横浜市青葉区）」でコンサートを開催している。理事長で声楽家の酒井沃子さんが、シニア層のコーラス指導を行う中で、高齢者の方でも年齢に関係なく練習で声が出てどんどん上達し、中には若い歌手より上手くなる人もいることに注目し、高齢者の晴れ舞台となるコンサートを開催しようと思ったのがきっかけである。

2003年の第1回から今年の8月で14回を数え、その他にもステップアップコンサートや記念コンサートも開催している。演奏会では、80歳を優に超えたお年寄りとは思えない澄んだ声、艶やかな歌曲に圧倒される。入場料は1,000円で、出演者の関係者だけでなく、この演奏会のファンも徐々に定着している。第一線級の声楽家や講評委員からもらえる講評が参加者の励みになり、個人的レッスンを受

けたり、イタリア歌曲を歌うためにイタリア語講座に通ったりする人も少なくないという。

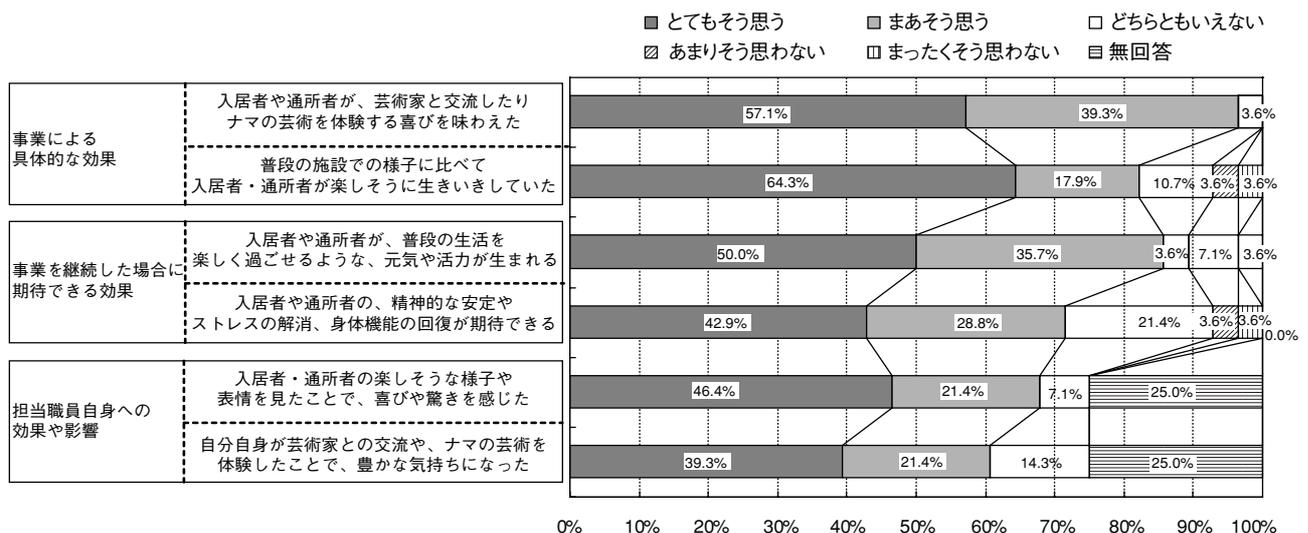
参加者には、晴れ舞台があること、回を重ねると上達すること、それで次の目標ができることが大きい、と事務局長の山中英男さんは語る。中には「舞台の上で死にたい、それができれば本望だ」という方さえいるようだ。ご夫人の伴奏でショパンを独唱した79歳の男性は2回目の出演。水泳やジョギングをして体力を維持しながら定期的なレッスンを受け、声楽を続けているという。69歳で声楽を始めたという女性は、77歳でプッチーニとモーツァルトのアリアを熱唱する。「辞書を引いたりしながら歌詞を覚えるのはたいへん」と言いつつ、娘さんにデザインしてもらったという鮮やかなブルーの舞台衣装を身につけた姿からは、とても実年齢が想像できない。

3—アーティストやアートが引き出す高齢者の潜在力

アーティストが学校や福祉施設を訪問して、ワークショップなどの参加体験型の授業を行うアウトリーチは、1990年代後半から活発になり、今では全国各地の公立文化施設や芸術団体が実施するようになった。(財)地域創造では、クラシック音楽の演奏家や現代ダンスのダンサー、振付家を各地に派遣し、全国の公共ホール等と共同で公演とアウトリーチを展開してきた。派遣先は学校が最も多いが、福祉施設を訪問するケースも少なくなく、2008年に施設職員を対象にアンケート調査を実施している。

その結果を見ると、サンプル数はさほど多くないものの、アーティストの活動によって入居者や通所者が生き生きとし、継続した場合への期待が大きいことがわかる。また、担当者自身にとっても、貴重な体験となっている点は注目できる。

[図表-2] 福祉施設におけるアウトリーチ活動の効果



(注) (財)地域創造の公共ホール音楽活性化事業、公共ホール現代ダンス活性化事業を受け入れた福祉施設の職員28名から得られた回答。
 (資料) (財)地域創造、文化・芸術による地域政策に関する調査研究、資料編①、平成22年3月(調査委託：(株)ニッセイ基礎研究所)

1 | さくら苑におけるお年寄りとの共同作曲——作曲家野村誠さんが10年以上続ける特養での活動

高齢者施設にアーティストが出向き、独自の活動を行う草分け的な存在は、作曲家の野村誠さんが1999年に横浜市の特別養護老人ホーム「さくら苑」で始めたものだろう。子どもたちとの共同作曲をはじめ、従来の作曲の概念を覆すような創作活動をしてきた野村さんは、長い人生経験のある、潜在

的に優れた発想力を持つお年寄りの感覚をつむいで作曲をしてみたいという動機から、老人ホームでの共同作曲を始めた。不定期ながらも現在まで活動は継続しており、近年は月1回ペースで開催されている。今では、野村さんのほかに、演出家、俳優、ダンサー等も参加しているが、交通費等を含めて無報酬の活動である。

実際、お年寄りとの共同作曲によって生まれた「わいわい音頭」は今でも作曲が継続されており、野村さんがこの活動から影響を受けて作曲した作品の中にはCDに収録されているものもある。ワークショップは毎回2時間程度、参加者は固定されておらず、アーティストやコーディネーター、施設職員も含め、毎回10～20名が参加している。

ピアニストでもある野村さんのワークショップの特長は「即興セッション」である。何か決まった演奏プログラムがあってそれを提供するという通常の音楽家の訪問とはまったく違う。参加者の顔ぶれやその日の雰囲気ゆゆるやかに始まり、お年寄りは野村さんのピアノに合わせて、自由気ままに楽器で音を出したり歌ったり、と自然に時間が流れていく。重要なのは、「共同作曲」という言葉どおり、野村さんが音楽を提供し、お年寄りがそれを楽しむ、という関係ではないことだ。

野村さんはお年寄りの小さな反応を見逃すことなく、ピアノやおしゃべりで自然と流れをつくり、お年寄りの参加を無理なく導いていく。特別、何かが起こるわけではないが、ワークショップが終わったときのお年寄りの表情や雰囲気が、野村さんと過ごす2時間の意味を何よりよく物語っている。

この事業を長年実施してきたさくら苑は、「人間は基本的に自由で、すべきことを他者に定められるものではない」という理念を掲げている。苑長の桜井里二さんは、野村さんの活動を次のように語っている。「お年寄りがこんなに良い表情をして、野村さんに会わなければ出てこないようなことが、風のように出てくる。それは本当に不思議な力だと思う。介護保険制度による高齢者施設介護の現場は、ある種、管理された生活環境だと思う。制度の目的から外れているものは、評価されないどころか、その態様によっては否定される。標準化された活動の対極にあるのが野村さんの活動。意味が深いもの、価値がある、尊い、人間の魂を解放させてくれる、独特なものを持っている」(資料2)

2 | ARDAのアートデリバリー——お年寄りとアーティストとの出会いから生まれるもの

アートデリバリーとは、NPO法人芸術資源開発機構（ARDA）によって名付けられたもので、「地域の様々な施設へアーティストとともにアートワークショップを届け、かかわるすべての人の心と身体を解きほぐし、生きる力を創る活動」である。その訪問先の中心は高齢者施設だ。

ARDAの代表理事の並河恵美子さんは、長年経営していた銀座の画廊を1990年代末に閉じた際、「社会の中で、人間とアートが直接触れ合う機会を作りたい。アートを必要としているのはお年寄りだ、と直感で思って」この活動を立ち上げた。造形と絵画、音楽とダンス、お花など、幅広いアーティストを、年間10回から20回程度、高齢者施設に派遣し、これまでの実施回数は100回を超えた。

初期の頃からアートデリバリーを積極的に実施してきた上井草ふれあいの家の所長、藤山邦子さんは、導入の狙いを次のように説明してくれた。「介護保険導入で、職員は、食事、排泄、お風呂、に追われている。もちろんその質を高めることは大事だが、人が人生のファイナルステージに立つときに、自分たちが育む文化的な要素がない、ということに疑問に思っていたので、やってみようと思った」

実施して藤山さんが「これだ」と思ったのは、単に楽しむ、ということではなく、高齢者の気持ち

が解放されるという点である。その間は自由でいられる、自分を表現できると思ってもらえる時間を、アーティストが生み出してくれるというのである。参加者は、皆、夢中になり、普段はおとなしい方から「私クレージーになっちゃった、躍動している感じ!」と言われて驚いたという。

一方、アーティストの側も、高齢者と交わることで普段の芸術活動とは違うものを得ている。ワークショップが終わった後、「介護するんじゃないくて、自分の方が介護されに來たみたい」というアーティストもいる。「純粋な気持ちで素の交流ができる。そんな機会は滅多にないからアーティストも続けられる」というのが並河さんの見方で、認知症の方が参加した場合にそうした傾向が強いという。

並河さんは、「人間は面白い。(認知症で)できないことがあっても、感じる力、表現する力など、人間しか持っていない力は最後まで残っている。それが全部同じではない点が重要だ」とも言う。例えば、作業療法でフラワーアレンジメントを行う場合、全員が同じ花で同じようにアレンジメントを作っていく。アートデリバリーで生け花を行う場合は、さらに、花を自分で選ぶところから始め、アーティストの誘導によって一人ひとりが独自のアレンジメントを完成させる。最近、認知症ケアの現場で重視されていることに、「自己決定の支援」があるという。言葉にならない言葉や整理できない思考を引き出していくケアは、本人の自信や尊厳の回復にもつながり、様々な相乗効果をもたらしていく。まさしくARDAの活動にはそうした要素が埋め込まれているのである。

ところが、前者は制度に沿ったものとして、介護保険の対象になるのに対し、後者は対象にならない。これが、アートデリバリーのような活動を普及させる大きな障害のひとつになっている。もうひとつの障害は、高齢者施設や介護の現場で、こうした活動の意義や重要性が理解されにくいことである。制度面の制約だけではなく、現場の介護士が、入居者と最もよく接しているのは自分たちで、高



上井草ふれあいの家で開催されたアートデリバリーの様子。上段：藤原ゆみこ(日本画家)さんの「わたしの手」、下段：新井英夫(ダンスアーティスト)の「ほぐす・つながる・あそぶ」。お年寄りたちの表情が印象的だ。写真提供：ARDA

齢者のことを一番よく理解しているのも自分たちだ、という自負が、反って新しいものを受け入れる障害になっているかもしれないというのである。

そうした課題を解決するため、ARDAでは、アートデリバリーの一環で介護士講座を実施している。入居者・通所者と同じワークショップを、介護士の方々に体験してもらうことで、この事業をよりよく理解してもらえ。また、介護士もお年寄りと一緒にワークショップを楽しめるようになり、介護する側、される側、という関係を超えて対等の立場になれることに介護士が気づく意味は大きい。

3 | 福祉や医療とアートを結ぶアーツアライブ——アーティストならではの発想から生まれる可能性

アーツアライブは、「美術や音楽などの芸術鑑賞や創造体験を通して医療や福祉の現場をはじめとした日常アートに接する機会が少ない人々の“日常生活を豊かなものにすること”さらに“アートの力によって人間性を回復すること”」を目的に活動している。

代表を務める林容子さんが、1999年に英国の慈善団体Arts for Healthの主催で開催された国際会議に参加し、感銘を受けて、同年、静岡県富士宮市の特別養護老人ホーム「百恵の郷」で、和紙の障子絵を作成する取り組みを行ったのが始まりである。自ら教鞭を執る美大の学生7名と完成間もない施設を訪問し、入居するお年寄り一人ひとりから丁寧な聞き取りを行い、それに基づいて部屋ごとに独自の障子絵を作成した。あるお年寄りは、子どもの頃の夏祭りの楽しい思い出を語り、その障子絵ができると、そこに自分も入れてほしいと、車いす姿で登場している。

あるいは、飼っていた犬や庭に咲いていた花のことを語り、描きかけの花を見て「そんな花じゃない」とベッドから起き上がってきて熱心に指示した方もいたそうだ。期せずして回想法的なプロジェクトともなり、最初とはまどっていた施設職員も、お年寄りの生き活きた表情に納得し、活動が続けられることになった。入居者が入れかわっても、そのまま残してほしいという要望から、今でも当時の障子絵が数多く残されている。ここでの活動は2007年まで続き、壁掛けやタイルアート、壁画など、施設はアートで一杯になっている。

静岡県富士市の介護老人福祉施設「ききょうの郷」で、2001年に行った「遊べるクッション」というプロジェクトはユニークだ。まずアーティストが、有機的な形のクッションを50個作成。クッションにはそれぞれ6～10個のプラスとマイナスのホックが縫いつけてあり、ランダムにつなげて自由な造形遊びができるようになっている。その中から、デイケア利用者の方々が好きなクッションを選び、思い思いの絵や図柄、子どもたちへの言葉などを描き、同市内の保育園の子どもたちにプレゼントした。施設を訪問したアーティストが「お年寄りたちは、いつも『何かをしてもらう』ばかりで自分は役に立たないと思っているんじゃないか」と気づいたことが、このアイディアの出発点になっている。アーティストとのコラボレーションで作ったクッションを、施設を訪ねてくる子どもたちにプレゼントし、社会の役に立つ機会を提供できたことで、お年寄りたちに笑顔が広がったという。

こうしたユニークなプロジェクトには、アーティストならではの視点が不可欠だと林さんは言う。そのため、事業を実施するには、まずアーティストと一緒に施設を訪問し詳しく見学する。「ききょうの里」を初めて訪問した際、当時はまだ「痴呆棟」と呼ばれる施設があって、エレベータも止まらず、施設担当者も視察コースから除外しようとしたところ、アーティストの強い希望で視察を実施。その結果、アーティストはその場所で何かやってみたい、ということになった。

認知症の方々が誤って食べてしまうなどの事故を防ぐため、そこにはカーテンも観葉植物もなく、何もない空間だった。実施を躊躇する施設の職員に対し、絶対に安全なアイデアを考えるから、とアーティストが提案したのは、帆布の上に、お年寄りの笑顔を写真にとってアイロンプリントした「思い出のアルバム」というタペストリーづくりだった。

それは、長い間、鏡で自分の顔を見たことのないお年寄りには大きなインパクトがある活動になった。次にこのアーティストが考えたのは、お年寄りと一緒に絵を描き、それを床に貼り付ける「美術ギャラリー」というアイデアだ。認知症の方々は、いつも下を向いて徘徊する、ということに着目したもので、絵の設置後、お年寄りたちは絵の場所で立ち止まるようになったという。

高齢者施設では、今までと違うことをすると事故が起こったり、病気になったりする危険性があるため、新しいサービスを始めることは難しい。しかし、アーティストがチャレンジした成果を踏まえ、施設側も従来の発想にとらわれない取り組みに挑戦するようになる。すなわち「福祉施設にアーティストという他者が入ってきて革新をもたらす」ことが、アーツアライブの事業の大きな成果だと林さんは強調する。最初はお年寄りの写真を撮ることに否定的だった職員も、お年寄りの笑顔が素敵だということに気づいて考え方が変わった。認知症の部屋にも鏡が入り、小さなお風呂ができて、事故を防ぐために何も置かない殺風景だった施設は、随分人間的な空間になったという。

4 | アート鑑賞プログラム——絵画鑑賞によって雄弁に語り始める認知症のお年寄りたち

アーツアライブが現在力を入れようとしているのが、認知症の方々を対象にしたアート鑑賞のプログラムである。ニューヨークの近代美術館が実施しているプログラムを参考にしたもので、最初は、高齢者施設で認知症の方々を対象に美術カタログを使い、次いで、プロジェクターで作品を投影する方法に切り替えて実施した。ある時には、普段はそうしたことに関心を示さない入居者が参加し、周囲がビックリするほど熱心に語り始め、お昼の時間もそのことを話し続けたそうである。しかも、2年間介護してきた介護士さんが知らないことが次々と出てきたという。



2011年6月にパナソニック汐留ミュージアムで開催されたアート鑑賞会の様子。作品解説をしているのが、アーツアライブ代表の林容子さん。写真提供：アーツアライブ

それらの成果を踏まえ、アーツアライブは今年から、若年性を含む初期認知症の患者が家族や友人、介護士の方とペアで参加する対話型の美術鑑賞プログラムを美術館で実施するようになった。一枚の絵に約10分、6作品ほどを鑑賞する約1時間のプログラムである。ニューヨークの近代美術館では、脳神経の専門家とプログラムの効果に関する検証が始まっているようで、林さんはアルツハイマーとアート鑑賞の関係について次のような興味深い話をしてくれた。

人間の脳には記憶（メモリー）と想像（イマジネーション）の機能があり、アルツハイマーでは記憶機能が退化するため、想像力の方が強くなり、いわばアーティストに近い状態になってくる。機能している脳を刺激すると、アルツハイマーの進行を遅らせたり、場合によっては直したりできる可能性があり、そういう意味でも想像力を刺激するアートの鑑賞プログラムは有効だ、というのである。

認知症の方々の中には、絵を見て、見事に作家の意図を言い当てる人もいる。かと思えば、絵なんかあまり見たこともない人が、椅子から立ち上がるほど熱心に訴えたり、「ここ」と指さして絵に触れそうになったりする。そうした反応に、この人がこんなにしゃべるのか、と介護士さんが驚くのだという。

[図表-3] 高齢者とアーティストやアートの出会いを推進する主な団体・事業の概要

名称 創設年 活動拠点	活動の概要
さくら苑におけるお年寄り と野村誠による共同作曲ワ ークショップ 1999年 特別養護老人ホームさくら 苑（横浜市）	<ul style="list-style-type: none"> ●1999年、作曲家の野村誠が「長い人生経験のある、潜在的な優れた発想力を持つお年寄りの感覚をつむいで作曲してみたい」という動機から、老人ホームでの共同作曲を開始。 ●現在まで不定期ながら間断なく継続しており、最近では月1回のペースで開催。 ●ワークショップは1回2時間程度、最近では演出家や俳優、ダンサーなどが参加することもあり、毎回、10～12人が参加。 ●お年寄りとの共同作曲によって結実したオリジナル曲「わいわい音頭」の作曲は、現在も継続している。
芸術資源開発機構（ARDA） 2002年4月（9月NPO認証） 杉並区他	<ul style="list-style-type: none"> ●国際高齢者年の1999年に、アーティストを高齢者施設に派遣する事業を開始。 ●芸術家と一緒に高齢者施設、保育園、児童館など地域の施設を訪問し、ワークショップを行って創造の時間を共有する「アートデリバリー」を中心に、アートプロジェクトや展覧会、シンポジウム、講座の企画・運営などを実施。 ●高齢者施設では入所者・通所者だけでなく、介護士を対象に同じ体験をしてもらい、事業の目的や意義、効果などを共有するため、「介護士講座」も実施している。
アーツアライブ 2009年6月（NPO認証） 同年9月（一般社団法人設立） 東京都他	<ul style="list-style-type: none"> ●1999年、代表の林容子さんが美術大学生を誘って活動をスタート。 ●美術や音楽などの芸術鑑賞や創造体験を通して医療や福祉の現場をはじめとした日常アートに接する機会が少ない人々を対象に、アート制作ワークショップ、認知症の方のためのアート鑑賞ガイド、巡回企画展、施設の壁画制作などを実施。 ●これまでに東京都、静岡県、神奈川県、新潟県内の延べ90箇所の医療福祉施設において120以上のアートプロジェクトを実施。延べ300人の作家や音楽家、3,000人のお年寄りや子供が参加。
公共ホール音楽活性化事業 等（(財)地域創造） 1998年 全国の公共ホールと連携し て実施	<ul style="list-style-type: none"> ●クラシック音楽、コンテンポラリーダンスのアーティストを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等でのアウトリーチとホールでのコンサートを実施。 ●アウトリーチ先は学校が最も多いが、高齢者施設でのワークショップも少なくない。 ●1998年に音楽、2005年に現代ダンスの事業が始まり、これまでに、全国の約300団体がこの事業を実施している。
アートミーツケア学会 2006年3月 全国	<ul style="list-style-type: none"> ●人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、また人間を幸福にし、人間の全体性を回復していくためのアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立。 ●これまでに4回の研究大会の他、フォーラムや展覧会の開催、調査研究などに取り組んでいる。

(注) 筆者がこれまでの研究活動の中で把握した事例で、網羅的に調べた中から抽出したものではない。
(資料) 各団体の提供資料、HP掲載情報などに基づいて作成。

4—アートが拓く超高齢社会の可能性

ここまで、取材した各事例の取り組みや、アートあるいはアーティストと高齢者の出会いで生まれたエピソードを紹介してきた。他にも紹介したいエピソードはたくさんあるが、最後に、関係者の話を引用しながら、このリサーチから見えてきたことを考察としてまとめておきたい。

1 | アートの持つ特性——「役割」を生み出す演劇と社会参加

まず、アートの持つ特性をあげておきたい。音楽や演劇、美術など分野によって異なるが、今回の調査で一番印象に残ったのは、演劇の持つ「役づくり」という特性である。生きがい探偵団の長谷川さんは、それを「どんな人にも役回りがあることだ」という。実社会の中の役割ではないにしても、芝居の中で役があり、自分が参加しないと稽古ができず、舞台も成立しない。舞台に立ちたくない人は、裏方や写真記録の担当として活躍すればいい。そして、舞台を見たお年寄りから「生きてて良かった」と言われれば、それが実社会の中での役割、社会的な貢献にもつながっていく。

最近の健康科学では、社会参加の機会がなくなることが健康の最大の阻害要因、老化の第一因子だと言われているそうである。昔は同居家族の中で、孫の送り迎えや家事などの役回りがあったが、同居が減り、ひとたび高齢者施設に入ってしまうと、自分の役はなくなってしまう。演劇活動は、そうした健康の阻害要因を取り除くのに大きな効果があるといえる。

また、舞台に立つには、台詞を覚えなければならない。覚えきれないにしても覚えようと努力するし、稽古でも、舞台でも、どのように表現すべきか自ら考えなければならない。しかし、介護予防センターでは、次々に与えられたメニューをこなすだけで、自分で考える必要がない、と言うのは浦河町の砂子沢さんである。演劇の場合、舞台に立って人から見られることも、大きな意味があるはずだ。

アートには人間が本来持っている力を引き出す力がある。腕を上げなければと思っても上がらないが、風を表現してみようと思えるような環境、きっかけ、雰囲気やダンサーが用意してくれると、自然に腕が上がる。それがアーティストならではの力であり、いろいろなものを見てきた経験が、お年寄りならではの表現、しかも一人ひとり違う身体の動きや絵になる、と語るのはARDAの並河さんである。

2 | アーティストの参画する意義——高齢者の表現を見極め、個性を引き出す力

二つ目はアーティストの参画する意義である。ARDAやアーツアライブの活動では、特にこの点が重要な要素となっている。アーティストは、いわば人とは異なる表現を生み出すことに生涯を捧げているような人たちである。アーティストならではの感性でお年寄りと接することで、普通の人なら見逃しそうな一人ひとりの小さな反応や違いに気づき、それを個性ある表現と認めて、そこから、その人独自の表現をさらに引き出していく。

今回の調査では、作業療法士の川口淳一さんにも話を伺った。川口さんは10年ほど前、北海道富良野市の介護老人保健施設で、NPO法人ふらの演劇工房と共同で「演劇リハビリテーション事業」^(注1)を実施し、現在は茨城県内の病院に作業療法士として勤めている。川口さんも「我々の眼にはその意味を理解することが難しい認知症高齢者の言動を、アーティストは『表現』へと昇華させてくれる視

点を持っている」という。ひとりひとりの表現に注目して、我々なら見過ごしてしまうような指先から発する何かを見逃さず、「スゴイ！」と言って褒めてくれる。一人ひとりの個性を瞬間的に輝かせてくれるのが、アーティストならではのことだと言う。

アーツアライブの林さんは、医者で道化師のパッチ・アダムスさんを招聘し、聖路加病院の小児病棟や高齢者施設の訪問に通訳として同行した経験がある。アダムスさんは、笑い、喜び、創造性が治療の根本的な一部でなければならないと主張し、アメリカの医療を変革する社会活動家として世界的に知られている。その際、林さんは「一人のためにこんなに時間をかけるのか」と思ったという。それは必ずしも物理的な時間ではなく、一人に全身全霊をかけ、もの凄い集中力で接するそうである。

介護士はついつい時間に追われて待つことができないが、アーティストはじっと待つ。その結果、こんなに集中できるの、こんな色遣いをするの、こんな大胆になれるの、とお年寄りの意外な面が見えてくる、というのは上井草ふれあいの家の藤山さんである。

3 | 集団活動の効果——高齢者のコミュニティづくりと新しいリハビリテーションの可能性

「生きがい探偵団」や「座・たくあん」では、稽古や本番以外の場面でも、団員が互いに連絡を取り合ったり、一緒に食事や趣味を楽しむなど、インフォーマルな形で相互扶助のコミュニティが生まれている。本番の舞台に向けて一緒に作品を創り上げる、ということで強い仲間意識が生まれ、それがある意味で高齢者のセーフティネットとしても機能している。ARDAの活動でも、普段は生まれにくい入居者、利用者同士の人間関係が、ワークショップを介して生まれている。

集団で活動する、ということについて、作業療法士の川口さんが、富良野の演劇リハビリテーション事業の一環として始めた「演劇ワークショップ」について興味深い話しをしてくれた。それは、老健施設のレクリエーションの枠組みで、演劇的な手法を使ったコミュニケーション・ワークショップを行ったもので、全国から作業療法士を招いて研修会も行うなど、大きな成果があった取り組みだ。通常のレクリエーションとの最大の違いは「提供しない」ということである。

今日はまず体操から始めましょう、という感じで始まるレクリエーションに対し、演劇ワークショップでは、お年寄りたちと一緒に輪になって、「今日は暑いね」「ビール飲みたいね」「じゃあ、飲もうよ」「じゃ、ついでくれる」と、マイムで集団の対話を進めていく。ヒエラルキーのないフラットの関係の中で介護士も一緒に参加すると、おむつを替えるときにいつも怒るおじいちゃんがビールついでくれたり、普段とは違う笑顔で笑ったりして、介護士が気づかされることも多いそうだ。その結果、介護の方法が変わり、質が高まることにつながるというのである。

現在は、集団でのリハビリには、介護報酬、診療報酬が出ないため、こうした活動は、施設や作業療法士の良心で行われているのが実態である。それでも、2011年6月に大宮で開催された日本作業療法学会では、点数・収入に結びつかないのを承知で、回復期病棟で集団でのリハビリに取り組んでいる病院が全体の40%ぐらいに達していることが報告されたそうである。

4 | 既存の高齢者福祉政策を超えて

今回のリサーチでインタビューをした関係者からは、現在の高齢者福祉政策に対する疑問を投げかける声も少なくなかった。まず、アートを介した活動はセラピーではない、というのは関係者の共通

した意見である。セラピーには治療という意味があり、お年寄りを病人と見ていることになるが、アート活動は、その人のどこか悪いところを直すためにやっている訳ではない。多くのアーティストは、高齢者を「介護される人」と見ることはなく、認知症のお年寄りでも、よくしゃべる人、しゃべらない人、色彩感覚の良い人、リズム感のある人など、普通の人に接するように接しているのがセラピーとは大きく異なる点だ。アーティストは、病気や障害ですらその人の個性ととらえているのである。

また、セラピーとして実施するには、具体的な成果が求められる他、病院や福祉施設など場所が限定され、週に何回、何時間という制限も生まれ、要介護と認定される必要もある。それが逆に成果や効果が生まれにくい状況を生み出しているのではないか、というのは生きがい探偵団の長谷川さんの分析である。生きがい探偵団のような活動では、そうした制約がないため、結果的にセラピー以上の効果が現れることがある、というのである。

また一般のリハビリテーションと演劇ワークショップの違いについて、川口さんは次のように指摘する。「リハビリは身体の機能回復というイメージが強いが、機能訓練はリハビリの一部であり、本来の『その人らしさ』を取り戻し、愛情に包まれた人間関係の回復を援助するプロセスのことである。演劇の中にはこれらを実現できる要素が詰まっている。演劇作品を創る過程では、多くの人々がそれぞれの役割を担い、自分にできることをやる。演劇をコミュニケーションツールとして活用することで、自分らしさを実感し、人とつながっていくことができる」(資料3)

お年寄りがある基準から外れていると見て、その基準に戻そうとするのが福祉行政だとすると、現在の福祉行政は間違っているのではないか。高齢者施設の入所者の多くは、しゃべれない、動けないからベッドにいるだけ。本当はやりたいことがあるはず。まだ役に立てることがあるはずだと思ってイライラしているんじゃないか。現在の福祉行政はそのチャンスを奪い取っているのかもしれない。こう指摘するのは「座・たくあん」の活動に長らく携わってきた砂子沢さんである。

5 | アートが拓く超高齢社会の未来像——高齢者と共存できる地域社会をめざして

本稿では、高齢者が芸術活動に取り組んだり、アーティストとのワークショップに参加したりすることで、介護士や家族が驚くような医療的、福祉的な幅広い効果が生まれていることを紹介した。もちろん、それらも重要なことに違いないが、アートやアーティストが高齢者福祉の現場に入っていくことは、それ以上の意味を有している。高齢者施設などの現場でアートの実践に取り組む方々の話を聞くと、むしろ、目に見える効果だけに惑わされてはならない、という思いが強くなる。

例えば、生きがい探偵団の長谷川さんは、高齢者や障害者とともに暮らすには、それを受け入れる社会の側こそ変わるべきなのに、ハンディキャップという言葉で、その重荷を障害者や高齢者に押しつけて、その人たちが健常者の社会に適應できるように強いているのではないかと疑問に感じるといふ。また、上井草ふれあいの家の藤山さんは、アートを通じて、高齢者の主体的な参加やパワーに接し、認知症の方の素敵な表現に出会ったときに、介護する側、される側という関係乗り越えて対等になれるところが、アートデリバリーの素晴らしいところだと力説する。

お年寄りとのワークショップなどで、医療的、福祉的な成果がもたらされることについて、作曲家の野村誠さんはこう語る。「言葉を発しなかった方が、セッションしているうちに徐々に『きれいな手だね』と言い出したりする。話せなかった人がこの活動を通して話せるようになった、とも言える

が、話せないように見えていたのはそもそも話す気もなかっただけなのかもしれない。無表情だった人が表情豊かになった、とも言えるが、もともと表情豊かにする必要がなかっただけだった、とも言えるかもしれない」(資料1)

つまり、高齢者とアートの出会いは、高齢者や認知症のお年寄りを、特別な存在、介護されるべき人、とみなしてしまうこと自体に大きな疑問を投げかけている。そしてそれを突き詰めれば、現在の福祉政策のあり方、あるいはそれを生み出す社会通念を問い直すべきではないか、そのように思えてくるのである。取材の中で、現在の福祉行政を「高齢者に対する小さな親切、しかし実は大きなお世話かもしれない」とさえ言った方もいる。

もちろん、現在の介護保険制度やその制度で利用できる在宅サービスや施設サービス、あるいはグループホームやケアハウスなど、現在の高齢者福祉政策は、今以上の充実が求められていることは間違いない。けれども、これから爆発的に増える高齢者をケアするために、今までと同じような福祉施設を作り続け、そこで働く介護士を増やし、それを現在の介護保険制度で賄っていくことは果たして可能なのだろうか。そのことには疑問を抱かずにはいられない。

もちろん、アートがその解決策をもたらしてくれるとは思えない。しかし、本稿で紹介した各地の取り組みを俯瞰すると、アートが媒介となって高齢者が地域や市民と共存できる新たなコミュニティを創出できるのではないかと、そんな可能性が見えていると思えるのである。

埋もれてしまったように見える高齢者の才能や社会の中の役割を、アーティストならではの眼差しと感受性によって、ときにはワークショップのようなアートならではの手法を駆使しながら見出していく。アート活動を通して、お年寄りたちは与えられるだけ、介護されるだけの存在から脱皮できる。そうした存在に追い込んでいく周囲の社会や我々の意識に変革をもたらす。

それは、高齢者が一人の人間としての尊厳、生きている誇りを取り戻し、人間性を回復することに他ならない。世界のどの国も経験したことのない超高齢社会を迎えた日本において、互いの違いや個性を認めあえるアートの存在が果たすべき役割は決して小さくない、と思えるのである。

◎文中引用資料

資料1：中野健、高齢者・障害者演劇事業—西和賀町からの報告—、『演劇会議、vol.128』、2008年11月

資料2：(財)地域創造、文化・芸術による地域政策に関する調査研究、資料編①、平成22年3月(調査委託：(株)ニッセイ基礎研究所)

資料3：川口淳一、演劇リハビリテーションの軌跡—富良野からの提言—、平成13年4月20日

◎参考文献

川口淳一、リハビリテーションの不思議—聴こえてくる、高齢者の〈こえ〉、2006年

林容子・湖山泰成共著、進化するアートコミュニケーション—ヘルスケアの現場に介入するアーティストたち—、2006年 NPO法人芸術資源開発機構(ARDA)、「アートで介護」—介護する人、される人のための芸術出張講座、2010年

(注1) 介護老人保健施設ふらので、「演劇創作活動」「演劇鑑賞活動」「演劇ワークショップ」の三本柱で実施された事業。演劇創作活動では、お年寄りが舞台に立つ、ということではなく、高齢者の生活に不可欠な「人間関係」と「役割」を演劇でいかに提供できるかを目的に、ポスターや大道具、小道具、衣装、会場飾りつけなどの仕事を高齢者が役割分担し、老健利用者と市民が共同で創った芝居の上演が行われた。

